

## ヘンリー・ソローと 19 世紀アメリカの自然環境保護 —博物学と湖沼学的研究から生態学的意識へ—

### Henry David Thoreau and Natural Environment Conservation in the 19th Century America —Through Studies of Natural History and Limnology to Ecological Epiphany—

山田 正雄

YAMADA Masao

---

**Abstract:** For two years and two months in the middle of 19th century America, Henry David Thoreau lived a simple life by the shore of Walden Pond in Massachusetts. In this essay, I examine the idea that Thoreau's natural environment conservation is based on his study of natural history and limnology, which culminated in having an ecological epiphany.

Having burned down some part of the forest while cooking at the riverside in early Spring, 1844, Thoreau agonized for a long time thereafter, and began to think deeply about the meaning of the forest. Moreover, when he observed changes in the water level of Walden Pond, he discovered that Walden Pond was linked to other nearby ponds. Thoreau was very well-acquainted with the *Code of Manu* in Upanishad philosophy, e.g., "Equally perceiving the supreme soul in all beings, and all beings in the supreme soul, he sacrifices his own spirit by fixing it on the spirit of God, and approaches the nature of that sole divinity, who shines by his own effulgence." (*EMM*, 131), and, similarly, "Let him [Brahmin] reflect also, with exclusive application of mind, on the subtle, inevitable, essence of the supreme spirit, and its complete existence in all beings, whether extremely high or low." (*EMM*, 137) Therefore, Thoreau came to understand the mechanism of the Chain of Nature, and finally arrived at his ecological view of the world.

From a viewpoint of wanting to protect the natural environment, Thoreau criticized the woodcutters, the townsmen and the Fitchburg Railroad, because they brought about the decimation of natural scenery and the destruction of natural environments. Knowing the importance of the forest, Thoreau quit his job as a land surveyor. A man well ahead of his time, Thoreau, through his influential writings, e.g. *Walden* and other essays, succeeded in enlightening his contemporaries about natural environment conservation over one-hundred-and-fifty years ago. The naturalist, John Burroughs, and forest conservationist, John Muir both followed in Thoreau's footsteps.

---

**Keywords:** *Code of Manu*, natural history, ecological epiphany, limnology, Massachusetts, natural environment conservation, Thoreau, Walden Pond, water level change 『マヌ法典』、博物学、生態学的意識、湖沼学、マサチューセッツ、自然環境保護、ソロー、ウォルデン池、水位変動、

## 1

過剰労働による人間性喪失の社会現象が見られた 19 世紀半ばの産業革命期 Victorian America において、ソーはウォルデン湖畔の独居生活(1845.7.4~47.9.6)で自然親交と Upanishad 哲学(インド思想)に基づく深い生き方、奴隷制廃止運動と深く関わって書いた社会政治論文で同時代人を啓蒙し、科学的な自然研究を通して人間性回復と文明からの解放を求めて価値ある生き方を示唆した自然散文作家である。

本稿で私が取り扱う問題は、「ソーと 19 世紀アメリカの自然環境保護」というテーマの下での「ソーの博物学研究と湖沼学研究から生態学的発想へ」が示すように、独居生活中の博物学(動物、植物、地学)研究から湖沼学(池や沢沼地)研究を経て生態学的な認識に到達して、自然環境保護に至る道筋である。ソーの自然環境保護に至る研究プロセスは、現代人に示唆するところが大きい。

## 2

ソーは幼少期から自然に対する関心を共有する両親の影響を受け、地域住民向けの地理学、植物学、鳥類学など多くの博物学講演が行なわれたコンコード・ライシームから知的刺激を受けながら、豊かな自然環境の中で成長した。彼はコンコード・センタースクール時代にはすでに周辺世界に対する関心を育み、コンコード・アカデミー時代を経てハーヴァード大学時代には博物学的な関心を十分に発展させていた。

ソーの博物学的研究の発展過程を辿るとき、教会を取り巻く穏やかな小村コンコードの変化に富んだ自然環境(地勢図参照)(1)(20:347)には、池が 12 箇所、丘が 19 箇所、沼沢地が 10 箇所、小川が 14 箇所、牧場が 5 箇所、河川が 3 箇所、崖が 3 箇所に点在していたことに注目すべきである。彼は終生この牧歌的な小村コンコードでライシームとエマスの強い知的刺激を受けながら、博物学的関心を発展させた。この自然環境と精神風土がソーの自然研究の原点になっていることは確実である。

博物学研究の発展過程として、まずソーの評論「マサチューセッツ州の博物誌」に注目したい。彼は 1842 年 3 月にエマスからマサチューセッツ州が版元の『マサチューセッツ州の博物誌』(*Natural History of Massachusetts*, 1842) についての評論を書くように求められて、これと同じ題名の論文を 1842 年の『ダイアル』7 月号に発表した(Harding, *Days* 116)。それはソーが T.W.ハリスの昆虫類、チェスター・デュイの植物類、D.H.ストローの魚類・鳥類、エベニツァー・エモンズの哺乳類が収録された博物学全集を読んで書いた評論であり、自身の日記の記事から抜粋して一定の長さをもつ論文として構成したものであった。しかし、それは後年に彼が科学的な自然研究に発展させることになる重要な評論である。(2)

「マサチューセッツ州の博物誌」は、評論よりもむしろ自然観察の記事の中にソー独自の思索と詩が挿入された論文としての印象を与える。 (“Books of natural history make the most cheerful winter reading. I read in Audubon with a thrill of delight, when the snow covers the

ground.” 5:103)とその冒頭で書かれた言葉は、博物学に対する強い関心を示している。彼が読んだのはオーデュボン(3)の『アメリカの鳥類』(*The Birds of America*, vol.4, octavo, 1827-38)であると推測できる。彼はまた 1847 年にアガシーズ(Jean Louis Rodolphe Agassiz, 1807-73)(4) の博物学標本の作成のために協力した。

ソローは自然が人の心身の疲労に回復をもたらす強壮剤であるとみなし、健康維持のために自然の中に身を置くことの重要性を語っている。

In society you will not find health, but in nature. Unless our feet at least stood in the midst of nature, all our faces would be pale and livid. Society is always diseased, and the best is the most so. There is no scent in it so wholesome as that of the pines, nor any fragrance so penetrating and restorative as the life-everlasting in high pastures. I would keep some book of natural history always by me as a sort of elixir, the reading of which should restore the tone of the system. (5:105)

自然美を瞑想する人には何ら害も失望も生じないとするソローの自然観には、自然は喪失した人間性に対する治癒力をもつという人間性回復の思想が内包されている。彼の博物学的研究の特質は、自然が人間に及ぼす精神的影響、言わば自然の精神的効用を与えることを主張するところにある。

他方、博物学研究には人間性と進歩の観念が採用されるべきだというエマスの影響を受けて、ソローは博物学研究を人間性と関連づけるべきだとみなして、人間の進歩の観念と関連づけて詳細な事実を探る科学的な自然研究の傾向を示すようになる。“What an admirable training is science for the more active warfare of life! ...Science is always brave.... But cowardice is unscientific; for there cannot be a science of ignorance. There may be a science of bravery, for that advances.” 5:106-07)

更に、この評論の思想的特質は、ソローが広い空間を自由な感覚を覚えて歩くとき、自然界には細部まで完璧な完全性があり、しかもすべての部分が生命に満ち溢れていることを暗示されたと語るところに見られる。“Entomology extends the limits of being in a new direction, so that I walk in nature with a sense of greater space and freedom. I suggest besides, that the universe is not rough-hewn, but perfect in its details.” 5:107)

ソローは鳥類、魚類、哺乳動物、爬虫類を観察して報告している。しかし、彼が博物学研究で最も精通していた分野は植物であった。

更にまた、この評論の思想的特質は、彼の道徳的自然観にある。たとえば、彼はワーズワスの精神的自叙伝『序曲』(*The Prelude or Growth of a Poet's Mind*, 1850)で歌われたように、自然が開示する道徳的性質に強い共感を示した。ソローにとっての自然とは、前述したように、植物のことである。彼は自然が人間に与える道徳的影響力、すなわち自然とは人間に感動させて教育してくれる存在であると書いた。

Nature has taken more care than the fondest parent for the education and refinement of her children. Consider the silent influence which flowers exert, no less upon the ditcher in the meadow than the lady in the bower..... I am struck with the pleasing friendships and unanimities of nature, as when the lichen on the trees takes the form of their leaves. (5:124)

ここには、花や森の樹木に道徳的想像力を掻き立てられたソーが自然との静かな共感を抱いて感動した内面的経験が描写されている。人間に精神的影響を及ぼすというソーの自然観は、超絶主義の思想的基盤に基づいたものである。(5)

ソーの博物学研究が示す思想的特質は、彼の自然解釈が知識や技術ではなく全身の感覚器官を行使することによって自然との共感あるいは感動に基づいたものという点にある。

Wisdom does not inspect, but behold. We must look a long time before we can see. ...The true man of science will know nature better by his finer organization. He will smell, taste, see, hear, feel, better than other men. His will be a deeper and finer experience. We do not learn by inference and deduction and the application of mathematics to philosophy, but by direct intercourse and sympathy. (5:131)

ソーの博物学研究を通して見た自然解釈は、直観的に認識され、自然を観る行為に伴って知的・道徳的な影響を受けるというものである。評論「マサチューセッツ州の博物誌」には、自然との関係で人間に生ずる感動・共感に基づいた内面的経験・自然認識が説かれている。これは、彼がこのような感動体験によって自然研究の科学的傾向を強め、科学的事実に基づく客観的な自然探求を目指し、超絶的な内面的経験をより具体的に発展させようとする心的作用によるものである、とみなされるべきである。

### 3

ソーは 1844 年 4 月末日に著名な市民サミエル・ホアー (Samuel Hoar) の息子エドワード (Edward Sherman Hoar) とフェア・ヘブン湾 (Fair Haven Bay) で釣り上げた魚を料理するために岸辺で焚火をして森を焼いた。ウォルデン池畔の森の独居生活は、この事件に起因しているかもしれない。当時、「森焼人」という噂を気にしていた。ソーがこの事件以来森について永続的に考える機会をもったことは確かな事実である。

*Walden* 第 2 章において、(“I went to the woods because I wished to live deliberately, to front only the essential facts of life, and see if I could not learn what it had to teach, and not, when I came to die, discover that I had not lived. I did not wish to live what was not life, living is so dear.” 2:100-01) とソーが書いたことは、森の焼失事件をできるだけ早く忘れて本来の自己を取り戻して自然と自我の探求に没頭しようとした意識の顕在化であるとみなすことができる。独居生活当初における彼の心境は、自責の念と研究心とが複雑に交錯していたことであろう。彼の苦悩は、森の焼失事件から 6 年が過ぎた 1850 年の次のような日記の記事にさえ窺える。

Hitherto I had felt like a guilty person,—nothing but shame and regret. But now I settled the matter with myself shortly. I said to myself: “Who are these men who are said to be the owners of these woods, and how am I related to them? I have set fire to the forest, but I have done no wrong. (8, *Journal* 2:21-25)

やがてソローは自分が焼いた森の所有者とその権利について考え始めた。事実、この頃の彼の日記には、森の所有権だけでなく森林保護に関する考察が書かれている(8, *Journal* 2:21-25)。彼は森を単なる個人の私有財産としてではなく自然環境の一部としてみなし、森の所有者による森の伐採を自然破壊の行為として『ウォルデン』で告発したのである。

ウォルデン池で湖沼学的観察データの収集を続けているとき、ソローは自然の事物の相関性を観察することの重要性に気づき、湖沼学的研究から自然界の連鎖性に確信して生態学的な意識を強めた。しかし、独居生活終結後、樵に伐採されて破壊された森の景観を直視して、彼は(“How can you expect the birds to sing when their groves are cut down?” 2:213)と述べて、池畔の景観を荒廃させた樵と森の所有者に対して批判の目を向けた。

第 1 に、ウォルデン池畔の樹木の伐採が景観の荒廃だけでなく、森に棲息する鳥類の剥離という環境破壊の現象をもたらしたとして、ソローは森の所有者と樵たちを告発した。第 2 に、ソローはウォルデン池の水を独占しようと企む強欲な村人だけでなく、ボーリング・スプリングの水を汚濁させ、ウォルデンの森の若い樹木の葉に打撃を与えたフィッチバーグ鉄道(Fitchburg Railroad)を(“That devilish Iron Horse” 2:214)と呼んで、自然環境の破壊者とみなして告発した。第 3 に、ソローは愛するウォルデン池畔の自然環境を破壊した樵たち、水辺に貧弱な小屋を立てたアイルランド人、水面を掬い取った採氷業者を非難して告発した。ウォルデン池自体が不変的な存在であることに比べて、池と池畔の景観を巡って生じた出来事、すなわち彼自身の景観への愛と荒廃した景観と破壊者に対する義憤は、すべて彼の心の内で起こった変化とみなして次のように語った。

Though the woodchoppers have laid bare first this shore and then that, and the Irish have built their sties by it, and the railroad has infringed on its border, and the ice-men have skimmed it once, it is itself unchanged, the same water which my youthful eyes fell on; all the change is in me. (2:214)

人間性喪失の社会現象だけでなく自然環境の破壊をもたらす物質文明を非難したソローにとって、自然は過剰労働によって喪失した人間性の回復をもたらす治療薬であり、すべての生物の生存には不可欠の存在であった。従って、彼が自然破壊ではなく、自然と調和して生きるべきだとみなしたことから自然環境保護の立場にあったことは疑問の余地がない。

ソローは伐採された池畔の森が再生するのを見て歓び、池を自分の内面的想像力で創造した喜びの源泉だけでなく、思想的にも深化した。それは(“Why, here is Walden, the same woodland lake that I discovered so many years ago; where a forest was cut down last winter another is

springing up by its shore as lustily as ever; the same thought is welling up to its surface that was then; it is the same liquid joy and happiness to itself and its Maker, ay, and it may be to me.” 2:214) と表現したことに窺える。

ソーの死後、妹ソファィア(Sophia Thoreau)と友人チャニング(Ellery Channing)の編集になる『メインの森』(*The Maine Woods*, 1864)に収録された「カタードンとメインの森」(1848)と「森林の推移」(“The Succession of Forest Trees,” 1860)は、森についての永続的な観察記録である。これらの論文が書かれた主要な動機は、やはりソーが森を焼いた事件が発端になっている。結局、ソーの独居生活における科学的な自然観察は、森の存在意義を探るためであった(Bowden 260-62)という見解は妥当であろう。

#### 4

ソーはボストンの採氷業者ヘンリー・チューダー(Henry Tudor)が連れてきた多数のアイランド人労働者による氷の切り出し作業を眺めていたとき、池が害されない芳しいビジネスとみなしたため独居生活期間の 1847 年 2 月に湖沼学研究を開始した。チューダーは長い間ボストン付近の池の氷を切り出して、ニュー・オーリンズからカルカットまで運搬して莫大な利益を獲得していた。彼は 1 日に約 1,000 トンの氷を切り出して、高さ 35 フィートに積み重ね、干し草をクッションにして板で覆って輸送していた(Harding, *Days* 189)。

この採氷作業から刺激を受けたソーは、池の現象に強く心を引かれてウォルデン池の氷について、“But the ice itself is the object of most interest, though you must improve the earliest opportunity to study it.” 2:272)と書いたように、池の初氷に関心を抱き、池の規模、水温、水質、水位、水深を他の池と比較観察してデータを記録した。それがソーの湖沼学研究の始まりであった。彼は池の観察データを収集して自然を客観的に解明しようと考えた。

絆川羔は「Edward S. Deevey, Jr.による“A Re-Examination of Thoreau’s *Walden*”—その湖沼学的考察」において、約 150 年前のソーの湖沼学的な観測に基づいた水温、透明度水質、栄養内容、酸素、アルカリと鉄、動物に関するデータが Deevey 氏による測定値とほぼ一致するので、ソーをアメリカ最初の湖沼学者であると指摘する(絆川 80-86)。しかし、私が重視した問題は、湖沼学的データの正確さではなく、ソーが湖沼学的研究プロセスでどのようにして生態学的視野へと向かい、自然環境保護の着想に到達したかという点にある。

ウォルデン池畔に生息する植物、哺乳類、爬虫類、魚類、水生植物に関する博物学的な観察と同時に、池の面積、水深、水位、水温、水質に関する湖沼学的観察を行なった。彼は池の 2 ～5 フィート上昇と下降といった水位変動が 30 年周期で起こり、しかもウォルデン池の水位変動に呼応して周辺のフリント池とホワイト池にもこの現象が連鎖的に生じることを観察して、“Flint’s Pond, a mile eastward, allowing for the disturbance occasioned by its inlets and outlets, and the smaller intermediate ponds also, sympathize with Walden, and recently attained their greatest height at the same time with the latter. The same is true, as far as my observation goes,

of White Pond.” 2:201)と語った。重要なことは、ソローがウォルデン池と他の池の連鎖的な水位変動が生じることを知って自然界のメカニズムを認識したという事実である。彼は自然の事物の相関関係に着目するようになった。

## 5

湖沼学研究に博物学の知識を用いたソローは、池と池畔の森に生息する小動物、魚類、昆虫類、水生植物、鳥類、植物との関連性に注目し、多様な生物と自然環境のバランス関係を認識するようになり、次第に生態学的視野を拡大した。彼は自然界におけるすべて個々の生物間には緊密な関係があること、すなわち循環的連鎖性が存在することを『マヌ法典』から学んでいたもので、自然環境を一つの完璧な集合的存在としての生態系とみなすようになった。

ソローは『ダイアル』1843年1月号に発表していた選集「民族の諸経典」の一つ『マヌ法典』に記述された、自我と神の探求に関する厳格な生活規範に深い感銘を受けてウォルデン池畔における独居生活を実践する靈感を受けた。彼は独居生活中に『マヌ法典』を実践に移していたが、徐々に感覚に依存する傾向を強めていった。彼は科学的観察から認識した自然の具体的な事実と『マヌ法典』の教義を関連づけ、博物学的知識と湖沼学的な観察によって自然界の生物間の平等関係と連鎖性という生態学的な認識に拡大された。

第1に、『マヌ法典』第3項目「清浄化と自己犠牲」における(“Equally perceiving the supreme soul in all beings, and all beings in the supreme soul, he sacrifices his own spirit by fixing it on the spirit of God, and approaches the nature of that sole divinity, who shines by his own effulgence.” *EEM*131)という記述は、インド修業僧が梵我一如を経て辿り着く人間の神格化の教義と同一である。

第2に、ソローは『マヌ法典』第8項目「バラモン」において、(“Let him reflect also, with exclusive application of mind, on the subtle, invisible, essence of the supreme spirit, and its complete existence in all beings, whether extremely high or low.” *EEM* 137)とか、(“Let every Brahmin with fixed attention consider all nature, both visible and invisible, as existing in the divine spirit.” *EEM*138)という記述から深い感銘を受けただけでなく、自然界における万物が平等関係にあるという理論を受容した。

第3に、『マヌ法典』第9項目「神」において、(“Thus the man, who perceives in his own soul the supreme soul present in all creatures, acquires equanimity towards them all, and shall be absorbed at last in the highest essence, even that of the Almighty himself.” *EEM*138-39)という記述から、ソローは『マヌ法典』におけるバラモンの究極的自我と神の探求に基づいた自然認識についての影響を受けて、個々の生物間の関係に着目し、やがて自然界における生態系の存在を想定するようになった。彼の自然研究はウパニシャット哲学を経て事実重視の科学的傾向を辿りながら、生態学的視野にまで拡大したと解釈することができる。

森を焼いた自身の体験、短期間にせよ土地測量による自然環境破壊を体験したことを反省し

ながら、樵の森林伐採による景観の荒廃や鉄道敷設による池の汚濁を告発して環境保護の啓蒙活動をした。ワーズワスがイギリス湖水地方の自然環境保護運動の啓蒙をしたように、ソーはマサチューセッツ州湖水地方の自然環境保護の啓蒙活動をした。彼が約 150 年前に博物学から湖沼学を経て生態学的見を開示したことは、バーローズ(John Burroughs, 1837-1921)(6) やミュア(John Muir, 1838-1914)(7) に自然環境保護の道を開いたという意味で大きな意義がある。

### Notes

- (1) コンコードの河川、牧場、崖、丘陵地、沢沼地など地勢を表わす数値は、ソーが *Journal* で言及した地図に基づいている。それは *The Writings of Henry David Thoreau* vol.20, p.347 に収録されている。
- (2) ソーの博物学的な記述は、*The Writings of Henry David Thoreau* 2, *The Writings of Henry David Thoreau* 8 (J2), 10(J4) に比較的多く見られる。
- (3) オーデュボンはいちに生まれ、フランスで教育を受け、ルソーやビュフォンを読んで自然研究への関心を抱いた。フランスの芸術家デイヴィッドに学んだ後、1804 年にフィラデルフィア近郊の父の屋敷に住み着いた。剥製術、絵画指導、磁器に花鳥を絵付けする研究などの仕事を行っていたが、彼は真剣に鳥類学に向かい、ケンタッキーやその周辺に存在する鳥類の絵画を描いた。この研究成果がエレファント二折版の『アメリカの鳥類』(1827-38)であった。その随伴書『鳥類学的伝記』(5 巻, 1831-39)がウィリアム・マクギリブレイと共著で出版された。[OCAL]
- (4) アガシーズはスイス生まれの科学者かつ教育者であった。1831 年にパリへ行ってパリ植物園の助教授になった。友人のキュヴィエとフンボルトの研究に助力し続けた。アガシーズが 1846 年に渡米したとき、「アメリカの博物学はその指導者を見出した」と言われた。1848 年初期、ハーヴァード大学ローレンス科学大学院の博物学教授になり、同時にハーヴァード大学の比較動物学博物館になる標本収集を始めた。[OCAL]
- (5) アメリカ超絶主義は、ドイツ観念論哲学を源流とする英独ロマン主義であり、ワーズワス、コールリッジ、カーライルによって人間には神や真理を探る超絶的理性、道徳的想像力、内面的良心といった認識能力があると説く思潮が 19 世紀前半アメリカに伝播した。エマスンが定義したように、それはアメリカの理想主義である。
- (6) バーローズはエマスンとソーの影響下で故郷キャッツキルズの鋭い観察によって、この 2 人の超絶主義作家以後の偉大な自然散文作家となった。彼の著作はすべて顕著な魅力と簡素な点に特徴があるが、処女作 *Wake-Robin*(1871)と *Birds and Poets*(1877)は最も詩的な作風である。*Locusts and Wild Honey*(1879)と *Squirrels and Other Fur-Bearers*(1900)は、科学的観察のよい多い時期の作品であり、それは 1908 年まで続いた。晩年期のバーローズは、社会の解放は冷たい科学的理性よりも偉大な教師や預言者や詩人や神秘主義者に依存するという信念を抱き、その教義を著作 *The Breath of Life*(1915) と *Accepting the Universe*(1920) に表わした。ホイットマンの友人だった彼は、詩人の初期修業時代を『詩人と人間としてのホイットマンについての覚書』(1867)に書いた。『我が少年期』(1992)は、自叙伝であり、*The Heart of John Burroughs's Journals* は 1928 年に出版された。[OCAL]
- (7) ミュアはスコットランド生まれの博物学者かつ探検家で、1849 年に渡米してウィスコンシン大学で化学、地学、植物学を教授した。これらの科目研究を発展させることから靈感を受けて、しばしば徒歩で合衆国中を探検旅行した。インディアナから西海岸までの旅行(1868)は、『崖までの 1000 マイルの徒歩旅行』(1916)として出版された。カリフォルニアはその後彼の故郷となり、翌年に西部の氷河形成とその地域の森林を研究し、彼の熱意の籠もった著作によって森林保護運動の指導者となった。彼の著作には、『我が青少年期』(1913)、『カリ



フォルニア山脈』(q.v.,1894)、『アメリカ国立公園』(1901)、犬についての感傷的な短篇 *Stickeen* (1909)、*My First Summer in the Sierra* (1911)、*Yosemite* (1912)、*Travels in Alaska*(1915); *Steep Trails*(1918)がある。[OCAL]

\* 以下は、ウォルデン池畔でソーロが観察した哺乳類、爬虫類、植物、魚類、鳥類、昆虫類の名称一覧リストであり、各欄の左端の数字は、*Walden* の頁数を示す。重複を避けた。

植物類	鳥類	哺乳類・爬虫類・魚介類
10 acorns ドングリ	18 turtle-dove キジバト	10 oxen ウシ
11 beans インゲン豆	45 lark ヒバリ	13 cat ネコ
20 red huckleberry 赤コケモモ	pewee タゲリ	dog イヌ
sand cherry ヒコザクラ	46 goose ガン	bison 野牛
nettletree エノキ	47 hen ニワトリ	15 mole モグラ
red pine アカマツ	48 thrush ツグミ	18 hound 獺犬
black ash 黒トネリコ	50 cowbirds ムクドリモドキ	horse 馬
white grape 白ブドウ	cuckoos カッコウ	26 snake ヘビ
yellow violet 黄スミレ	woodthrush アメリカモリクイムシ	33 foxes キツネ
45 white pine ストローブマツ	veery ヴィーリ 茶色ツグミ	48 woodchuck ウッドチャック
hickories ヒッコリー	scarlet tanager 赤フウキンチョウ	51 tortoise カメ
48 sumach ウルシ	field sparrow ヒメスズメモドキ	60 squirrels リス
blackberry ブラックベリー	whip-poor-will ヨタカ	133 field mice ノネズミ
50 rice 米	cormorants ウ	bear クマ
77 huckleberry コケモモ	ostriches ダチョウ	moose ムース
88 cypress イトスギ	125 fish hawk ミサゴ	caribou トナカイ
date tree ナツメヤシ	reed-birds コメクイドリ	135 wolf オオカミ
92 apple tree 野生リンゴ	partridge エリマキライチョウ	fox キツネ
red maple 紅カエデ	130 owl フクロウ	rabbit ウサビ
birches シラカバ	132 field mice ノネズミ	143 skunk スカンク
97 shrub oak ヒイラギカシ	138 screech owl アメリカオオコノハズク	144 bullfrog ウシガエル
125 life-everlasting ヤマハハコ	hooting owl アメリカフクロウ	205 frog カエル
126 chestnut クリ	139 chickadee アメリカコガラ	tortoises カメ
strawberry ストロベリー	141 chanticleer 野生オンドリ	muskrat マスクラット
pitch pine リギタマツ	142 oriole ムクドリモドキ	minks ミンク
Johnswort ジョンスウオート	cat owl ネコフクロウ	mud-turtle ドロカメ
goldenrod アキノキリンソウ	205 ducks カモ	207 skater insects アメンボウ
groundnut アメリカホドイモ	geese ガン	208 water-bug ミズスマシ
128 cranberry クランベリー	swallows ツバメ	218 swine ブタ
132 daisies ヒナギク	peetweeds カワセミ	221 hummingbirds ハチドリ
spruce トウヒ	fish hawk ミサゴ	225 musquash ジャコウネズミ
cedar ヒマラヤスギ	gull カモメ	243 horse ウマ
139 usnea lichen サルオガセ	loon アビ	goat ヤギ
143 alder ハンノキ	247 woodpeckers キツツキ	wolf オオカミ
poplar ポプラ	250 robin コマドリ	250 mice ハツカネズミ
144 willow ヤナギ	hen メンドリ	257 woodchuck ウッドチャック
185 elm ニレ	262 ducks カモメ	263 bison 野牛
buttonwoods アメリカ鈴懸ナ	263 jay カケス	red squirrels 赤リス
198 weeds 水草	264 crow カラス	wasps スズメバチ
flag ガマ	293 barred owl アメリカフクロウ	299 seal アザラシ
burlrush イグサ	300 cat owl ネコフクロウ	309 hares 野ウサギ
Pond lily スイレン	301 partridge エリマキライチョウ	350 toads ヒキガエル
heart-leaves ハートリーフ	304 chickadees シジュウカラ	

	potamogetons	ポタモゲトン		titmice	シジュウカラ			
	water-target	ジュンサイ		sparrow	スズメ			
201	pitch pine	リギダマツ	325	snowbirds	ユキヒメドリ			
	birches	シラカバ	334	bluebird	ブルーバード			
	alder	ハンノキ		song sparrow	ウタスズメ			
	aspens	ハコヤナギ		red-wing	ワキアカツグミ			
202	maple	カエデ	345	pigeons	ハト			
	blueberry	ブルーベリー		martins	イワツバメ			
203	hazel	ハシバミ		nighthawk	ヨタカ			
207	thistle-down	アザミの冠毛	350	bittern	ギイサギ			
216	ripple	イグサ		meadow-hen	クイナ	193	pouts	ナマズ
	English hay	イギリス干草	351	brown thrasher	チャイロツグミモドキ		perch	スズキ
	Cranberry	ツルコケモモ		veery	ヴィーリ、チャイロツグミ		shiners	シャイナー
	fungus	キノコ		wood pewee	モリタイランチョウ	197	pickerel	カワマス
221	white lily	白スイレン		chewink	トウヒチョウ	204	perch	スズキ
	common sweet flag	ショウブ	353	snipes	シギ		pouts	ナマズ
	blue flag	アヤ		woodcocks	ヤマシギ		roach	ローチ
223	cedar	ヒマラヤスギ					bream	ブリーム
	common sweet flag	ショウブ					eel	ウナギ
	juniper	ビャクシン					dace	デース
	toadstools	トードストール					dace	デース
	swamp-pink	ヘロニアス				205	trout	マス
	dogwood	ハナミズキ				206	sucker	サッカー
	red alder	赤いハンノキ					lampreys	ヤツメウナギ
	waxwork	ツルウメモドキ				225	shell	貝
	black birch	レンタカンバ						
224	yellow birch	キハダカンバ						
	beech	ブナ						
	bass	シナノキ						

### Works Cited

- \* Thoreau, Henry David. *The Writings of Henry David Thoreau II*. New York: AMS, 1968.  
本文における括弧内引証の表記については、(2:100-01)と略す。以下同様。
- \* ————. *The Writings of Henry David Thoreau V*. New York: AMS Press, 1968.
- \* ————. *The Writings of Henry David Thoreau VIII (Journal 2)*. New York: AMS Press, 1968.
- \* ————. *The Writings of Henry David Thoreau XX*. New York: AMS Press, 1968.
- \* ————. *Early Essays and Miscellanies of Henry David Thoreau*. Ed. Joseph J. Moldenhauer, and Edwin Moser. Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1975
- \* Harding, Walter. *The Days of Henry David Thoreau: A Biography*. New Jersey: Princeton University Press, 1982.
- \* 絆川 崇「“Edward S. Deevey, Jr. による A Re-Examination of Thoreau’s Walden” —その湖沼学的考察」『ヘンリー・ソー研究論文集』31. 日本ソー学会編 2005.
- \* *The Oxford Companion to American Literature*, ed. James D. Hart. (Oxford University Press, 1953) を参考にした。本文における括弧内引証の表記については、[OCAL]と略す。